

第一部 基調講演

日本の覚悟

～大変動の世界～



ジャーナリスト

馬 信彦

二十世紀最初の年頭の夢

最初に、一九〇一年（明治三十四年）元旦から二日にかけて、つまり二十世紀が始まったときに、当時の報知新聞、今のスポーツ報知ではなくて、日刊紙の「報知新聞」が、約二十項目にわたって、この百年間で何が起こるかという予測を書いているのです。この予測はなかなか面白くて、全部は挙げられないけれども、例えば無線電信電話というものがそのうちに起こるだろう。そのときには東京・ニューヨークが自由に電話をかけることができるのではないか。これはもう実現しているわけですね。

それから七日間世界一周。今は七日間どころではなくて、一日でもできるというような時代になっていくわけですね。それから三番目に、「空中軍艦・空中砲台」という予測が出ています。爆撃機やクルーザー・ミサイルのようなものを考えると、これも実現しているのかなという感じがしますし、それから「暑寒知らず」になるだろうと、これはエアコンです。エアコンによって、われわれは、夏も冬も快適に過ごせるということになる。それから「人声十里に達す」。人の声が十里に達するという予測も出ています。

これは電話や携帯電話のようなことだろうと思います。それから写真電話。これは電話口に立てば、相手の顔が見えて話せる。それから「買物便法」というものもあります。要するに買物物が非常にしやすくなる。これは言ってみれば、今のネット販売や通信販売と考えれば、今の思いますが、買物便法という言葉で、自宅にいながら遠くの品物を注文して買うことができるというようにことを予測しているのです。

このようなことを二十数項目にわたって予測しているわけです。僕が数えたところ、大体、現代で実現しているものが十四項目です。当時の人たちの構想力といいますが、夢を考える力といいますが、なかなか豊かだった。そして、そのような構想力があつたから、企業なり政府なりがその構想を実現するためにいろいろなことを考えていって、それが今日になつてきているのかなという感じがいたします。

世界は大動乱の時代

そのような前提の中で、この時代に問われているものは、一体、二十一世紀をどのような時代にするのかという構想力

を問われているのではないかと思うわけです。ここ十年、二十年、日本は「失われた十年」「失われた二十年」ということが言われていて、そして、その展望がまだ見えていないわけですね。安倍政権になってから、金融の異次元緩和という形で、金融はある程度緩和した。それから、財政の機動的編成というような形で、財政で刺激するというようなことがあつて、景気は多少、前に比べればよくなってきた。通貨は、一ドル八十円前後だったものが百円台まで戻ったり、あるいは株価も、七千円台だったものが一万四、五千円まで戻ってきているけれども、そこで止まってしまっているわけですね。そのような意味で言うと、「第三の矢」と言われている、この二十一世紀にどのようなイノベーションを起こしたらいいかということが、問われているのではないのかと思います。

一方で世界は、めちゃくちゃに大動乱の時代になっているのです。経済で言えば、二〇〇八年にリーマンショックがあつて、それが一応、片がついたかなと思つただけけれども、実際は片がついていなくて、それを引きずってリーマンショックを何とか抑えようとして、各国が

相当なお金をつぎ込んだのです。結局、そのことがユーロ危機を引き起こしてしまつた。現在の何となく世界的な不況というものは、結局リーマンショックから依然続いていてと考えていいと思います。政治になるともっと大変です。例えば、チュニジアから始まつた中東の革命は、エジプトに行き、リビアに行き、イエメンに行き、そして今、シリアで膠着状態になっているわけです。それから、ヨーロッパの政権は、去年一年間でほとんど全部替りました。それはユーロ危機が来て、ガタガタになつてしまつたわけですね。「PIGS」という言葉があります。すけれども、これは勝という意味ですが、ユーロ圏の中で最も財政が悪い。Pはポルトガル、Iはイタリア、Gはギリシャ、Sがスペインと、ここは全部政権が替りました。これだけではなくて、去年はサルコジからオランドにフランスの大統領も替りました。それからロシアのプーチンが替つたのも去年の初めです。その他、個別の中小国もほとんど政権が替つたというのがヨーロッパの状況です。

アジアを見てみると、習近平政権が去年の四月にこれから十年間やるというこ

とで、中国の政権も替つたわけです。それから北朝鮮の金正恩、韓国の大統領も女性の大統領になるという形で替わるわけです。日本の政権も、毎年毎年替わつていきますけれども、民主党政権から自民党政権に去年の十一月に替つた。それからオーストラリアも替りましたし、アメリカはオバマが再選になりましたけれども、閣僚クラスはほとんど全員入れ替へてですね。いかに世界が大きな動乱を生んでいるかということが、非常によく分かるのではないかと思います。

富裕と貧困の二極化

もう一つ世界を規定するものとして、社会というものがあつてですね。今、社会はどこも二極化しています。国で言えば、富裕国と貧困国に二極化しているわけです。資源を持っているところは富裕国になる。また、一国の中でも富裕層と貧困層に分かれてきて、あちらこちらでデモが起こっている。日本も、非正規社員が二千万人を超えたわけですが、二千万人ということは、働いている人の三分の一を超えます。ヨーロッパやアメリカ、中国、ロシアでは常にいろいろな問題を掲げながら混乱が起きているという

ことは、背景に二極化があるということ
が非常に大きいわけです。

それから自然現象ですね。これは日本
を見ても分かりますけれども、自然現象
が荒れているということは、ヨーロッパ
もアメリカも中国もどこも同じです。中
国はどんどん砂漠化が進み、工場の排煙
なども重なってPM2.5などというも
のがどんどん飛んでくるというような感
じになっていますね。まさに世界は、大
動乱時代を迎えているのです。

そして日本人は、失われた二十年があ
って、それからなかなか立ち直れないた
めに、若い人はだんだん内向きになる。
あるいは海外に出ていきたくない、何と
なく誇りを失ってしまう。そのような意
味で言うと、自信喪失の傾向があるのか
と思います。この失われた二十年と三
一というものは、日本人の心情を相当
変えてきたのかなという感じがいたしま
す。

そのような中で世界も日本も、この二
十一世紀をどのように生き抜いたらいい
かということ、今考えているさなかだ
ろうと思うのですね。十九世紀はどち
らかという封建時代が色濃く残っていた
時代で、二十世紀はその封建時代を近代

考えていたのですね。しかし、三年たっ
ても五年たっても戻らないので、これは
いつもとは違う不況だなということを感じ
始めた。しかしながら企業そのものが
大きな転換をしなかったから、あつとい
う間に失われた十年になってしまってい
ます。

そして、九〇年代の後半から、ネット
社会がやってくるわけですね。同時にグ
ローバル化社会がやってくるわけです。
かつては日本が独り勝ちしていたけれど
も、そこに韓国、あるいは中国、あるい
は東欧諸国という新興国が、汎用品など
は日本と同じようなものをもっと安い価
格で作るから、日本が「いつでも元に戻
れるよ」と思っていたけれども、戻れな
くなってしまった。これが失われた十年
の大きな特色だろうと思います。その後
も、次にいい戦略が出せないまま、失わ
れた二十年になってしまったということ
が実態なのかなと思います。

ここに一つの統計があります。全世界
における企業の株式の時価総額ランキン
グ。一九九〇年はランキングベスト二〇
のうち、十四社が日本です。驚くべき数
字です。

これが二〇〇七年になると、日本は十

国家に変えて、そして経済では自由主義、
市場主義のようなものがだんだん入って
きたわけです。しかし、九〇年代の後半
ぐらいからネットの社会がやってくる。
そうするとインターネットで一気にグロ



ーバル化してくる。それから九〇年に冷
戦が崩壊しました。ソ連、中国、インド
も社会主義的政策を取ってしまいましたね。
さらに言えば、東欧、中南米やアジアに
も社会主義国がありました。このような
社会主義国の全体の人数が、大体三十億

八位にトヨタ自動車が一社入っているだ
けです。二〇一〇年のトップ一〇はど
うか。ほんの三、四年前ですね。一位がベ
トロ・チャイナです。中国の石油関係で
すね。二位がエクソン・モービル、アメ
リカですね。三位がマイクロソフト、日
本は一つも入っていません。今、ベス
ト二〇に入っている日本の会社はないで
しょうね。それほど、この十年間、二十
年間のスピードと変化が、非常に速かつ
たということなのだろうと思います。

BRICsという言葉がありますね。
ブラジル、ロシア、インド、チャイナを
BRICsと呼んで、新興国と呼んでい
ますけれども、中国は二〇一〇年に日本
を抜いて、世界第二位のGDP(国内総
生産)大国になりました。これはゴール
ドマン・サクスの予測ですけれども、こ
のまま行くと、インドは二〇二七年に日本
を抜くだろう。ブラジルは二〇三四年に、
そして、ロシアは、二〇三七年に日本を
抜くだろう。二〇四〇年までに日本は、
いわば普通の国になってしまうというこ
となのではないかと思えますね。今、世
界は、そのような大きな動乱時代にある。

成長するアジア・太平洋地域

ぐらいいりました。先進国の人数は、十
億人ぐらいですね。

八〇年代は、日本が圧倒的に強かった
わけです。僕は八一年から約四年間、ア
メリカでワシントンの特派員をやってい
ましたけれども、アメリカでもヨーロッ
パでも、まさに日本の産業が一人天下だ
ったわけです。それはなぜかという点、
ヨーロッパやアメリカは、すでに豊かな
近代国家を作って、近代的なテレビなど
が家にそろっていた。従って、あくせ
く働くという意欲もなかったわけです。大
体七時間から八時間働けば、家へ帰って、
あとは何となくのんびり過ごすという、
そのような生活習慣になっていた。そこ
へ日本人がめっちゃくちゃに働いて、八時
間労働と言われていたけれども、サービ
ス残業なども含めればみんな十四、五時
間働いて、しかも日本人は器用で、繊
細で、作るものもいいですから、圧倒的
に日本のものが勝つわけです。

ネット社会とグローバル化

そして、九〇年にバブルが崩壊するわ
けです。バブルが崩壊したときには、バ
ブルは崩壊したけれども、「多分すぐ元
に戻るだろう」と当時の日本人はみんな

そのような意味で言うと、これから成
長するところはどこかという点、アジ
ア・太平洋なわけです。要するに成長す
るためにはどうしたらいいかというと、
中間層がいるということが大事なので
すね。貧困層と富裕層の二極化ではなくて、
中間層か、中流層が大きければ、物がた
くさん売れるわけです。日本は戦争直後
は一億総貧乏の時代でした。それが一九
六〇年前後に、「一億総中流」という言
葉がやりだしたのでですね。一九四五年
の戦争が終わったときは、隣を見てもど
こを見ても、みんな貧乏な人たちがかり
だった。みんな同じだから、みんな我慢
して、それで一生懸命頑張ろうとしてい
たのです。五〇年代までは、「三種の
神器」といって、電気冷蔵庫と洗濯機と
白黒テレビ、そのような新しいものを口
インか何かで買って、生活をよくしたい。
それら三種の神器を取りそろえると、次
は「3C」といわれて、カラーテレビ、
クーラー、それから、車ですね。これを
買いたいとなったのが、一九六〇年代後
半からです。そのような欲望を裏らせる
ために、日本はずっと頑張ってきたわけ
です。それがまた日本の経済を強くして
きたわけです。

だけれども日本も、一九八〇年代の半ばくらいには、ほとんどの家庭で家を持ち、車を持ち、電気冷蔵庫を持ち、エアコンを持ち、ある意味で言うところの満ち足りた生活になってきてしまった。今、買いたいものは何かといっても、ほとんど見当たらないわけですね。そうなってくる働き方も、だんだん前のように一生懸命働かなくなってくる。ところが韓国、中国、東欧のような国々は、欲望がまだあるから、私も車を持ちたい、電気冷蔵庫を持ちたい、何々を持ちたいというものが出てきて、一生懸命働き、安くていい製品を作ってしまうために、日本がなかなか勝てない。そのような状況に、今陥っているのではないかと思います。

また、二十一世紀というときには、そのような問題と同時に、世界全体がグローバル化とIT化の時代へ入ってしまったわけですね。そこがまた違った側面を見せているわけですね。グローバル化というのは、一番安いところで商品を作って、そして、その技術をうまく移転して、そこから輸出することが一番コストが安くできるわけですね。

例えばヨーロッパには、オランダの有名な会社が、日本の花王のような会社が

ありましたけれども、みんなそれぞれ国によって通貨も違うし、税関もあります。そうすると、ヨーロッパで売ろうと思うと、十三か所ぐらいに工場を持っていくわけですね。今、ヨーロッパは、一種のヨーロッパ合衆国になっているわけですね。ですから物の移動も自由、人の移動も自由、お金もユーロという単一通貨になると、一番物流で都合のいいところに二か所だけ工場を造れば、そこからパレットと運んでしまえば、いちいち税関の検査も受けなくてもいいし、お金をわざわざ替えずともいいというようになってくるわけですね。

そのようにして、二十一世紀というのは、ITとグローバル化によって、資本主義の在り方も全然変わってきたわけですね。七〇年代、八〇年代、九〇年代の半ばぐらいまでは、一生懸命いいものを作ってたものが、今やIT化、グローバル化になってくると、最も安いところに技術を持って行って、本当の技術は隠しておくけれども、汎用品などはそこで作ったほうがコストが安くなるという形で、九〇年代に中国が社会主義からもう少し資本主義的な方向に移ったときには、み

に投資したり、石油に投資したり、資源に投資したりする。その投資先によって、値段がどんどん動いてしまっていて、世界は混乱をしている。

SDIによるアメリカの立ち直り

そのような中で、一体日本はどうするかということが、今、問われているわけですね。安倍さんは、異次元の金融緩和、あるいは財政の機動的出動、それから財政の赤字をなくすということと同時に、



第三の経済戦略ということを言っているわけですね。問題は第三の経済戦略が本当にうまくいくかどうかということなのです。今、安倍政権が言っていることは特区を作る、規制緩和をすること、うなことが中心だけれども、一体、何をやってやるのかということが大事なわけですね。

よく歴史を振り返ってみると、実はアメリカも、失われた二十年、三十年の時期があったわけですね。それは、一九六〇年代末から九〇年代ぐらいまでですね。アメリカは、ベトナム戦争で社会も混乱し、腐敗し、「一生懸命働くなんて、ばかきさいや」という形で、社会は混乱するわけですね。僕はちょうど一九八〇年ぐらいからアメリカにいましたけれども、あの当時のアメリカは、本当にひどい状況でした。

しかし、アメリカは、九〇年代の後半からバブルと生き延びてくるわけですね。それは何かというと、SDI構想ということで、冷戦時代にソ連から飛んできたミサイルを宇宙空間で撃ち落とすという技術を開発するために、アメリカは世界の技術を全部集めるわけですね。そして、それは外へ流してはいけないということ、

んな中国に投資したわけですね。ヨーロッパもアメリカも、そこへ投資したわけですね。そのうちに中国は、その技術を身につけてテレビを作り、電気洗濯機を作り、携帯を作り、携帯電話を作ってきた。それを輸出し始めたわけですね。今、世界一の輸出国は中国です。携帯の電話数も、テレビの電話数も、圧倒的に中国のほうが多く作っているわけですね。そして、同時に韓国も、中国へ輸出し、そこで物を作って、日本よりも安い製品をどんどん作るから、サムスンやLG、現代などが、日本よりも競争力が強くなってしまった。このように、九〇年代末ぐらいからはIT化、グローバル化という時代に入ってきて、資本主義の在り方そのものを変えてきてしまったということが、非常に大きいと思います。

また、九〇年代後半のIT化、グローバル化時代になってくると、物よりも通貨のほうが多くなってしまったわけですね。GDPで言うと、今、その五十倍、六十倍の通貨が世界中をうろろ回っているわけですね。そうすると、物を買わないでも、通貨だけでもうけようとする人が出てくるわけですね。それが、為替に投資したり、株に投資したり、あるいは商品

アメリカが独り占めするわけですね。ところが九〇年に冷戦が終わって、ソ連という敵がいなくなるわけですね。問題はSDIで集めた技術を、シリコンバレーやバイオ技術、資源の技術などに開放するわけですね。それでアメリカは、一九八〇年代から若い人たちがいるような新しい技術を作るわけですね。それがアップルであり、マイクロソフトであり、グーグルであり、フェイスブックであり、ヤフーであり、そのような新しい産業が出てくるわけですね。

それから資源もそうですね。最近ではシェールガスなども出てきています。バイオ技術も、アメリカの西海岸やボストン、ワシントンあたりにバイオ技術の会社がバブルと出てきた。つまり、今までになかった新しい産業と言ってもいいと思いますけれども、そのような構想力を持つて、まさに今、世界を席巻しているのはアップルであり、マイクロソフトであり、グーグルでありという感じになるし、バイオの世界もアメリカの会社が席巻しているわけですね。それはやはりアメリカの構想力ですね。

しかし、実際にアップルやマイクロソフトなどで作っているものの部品は、圧

倒的に日本製なのです。それが日本の強さだったと思うのです。今、日本は、部品や細かい技術などでは圧倒的に世界一です。だけれども、それを使ってどのようなものを作ったら、どのような人々が欲しい商品を作ったらいいかという、そのような構想力が少し欠けているのではないかという感じがしますね。これからの世界では、そのような構想力をどうするかということが、僕は大事なのではないかと思っています。

EUの成立と経済不安

ヨーロッパも、一九六〇年代から九〇年代ぐらいまではひどかったですね。だけれども、ヨーロッパも、何とか立ち直らなければいけないということで、一生懸命考えるわけです。その考えたものが、制度改革で、ヨーロッパは一つの国になる、ヨーロッパ合衆国になるということなんです。ですから税関もなくし、為替の手数料なども取らず、一つの通貨にしよう。人の移動も自由にしようというようになったわけです。そのような意味で言うと、ヨーロッパ全体の制度を大きく変えたのです。そして通貨と人と物の移動に関わるコストを、ガクンと安くした。

その結果、ヨーロッパも力を持ってきたということなのだろうと思います。

しかし、そのEUにヨーロッパの国々を入れるときに、財政などにもいろいろな基準があつたのだけれども、マーケットが広がるということで多くの国を入れ、審査が甘かったわけです。その甘かった国々が、先ほど言ったPIGSといわれる国々で、いかにもラテン民族らしい感じで、「俺のこゝはちゃんとできてるよ」と言っていてユーロ圏に入るのだけれども、実態はあまりよくないということがばれて、それを今度は、投機筋、先ほど言った物流の五十倍も六十倍もお金があるときはイタリアを、あるときはギリシヤを、あるときはスペインを襲うという感じで、あそここの経済がおかしくなってしまうたというのが今の実情なのだろうと思います。そのような経済をどのように回復していくかということが、今、ヨーロッパでは大きなテーマになっているわけですね。

中間層はアジア全体で八・八億人

そのような状況の中に日本がいるのだということになります。日本の立ち位置は、非常に有利な立ち位置にあります。

とは、ブーチンにとっては一番頭の痛い問題なのです。そのような意味で言うと、日本の技術に入ってもらって、日本人が来てくれるのが一番いいと思っているわけです。日本人に来てほしいということ、「北方四島のことを考えてもいいよ」などといういろいろな餌を投げてくるわけですね。

今、日本は第三の国難

まさにアジア・太平洋の中間層、アジア・太平洋の果実を、アメリカが取るか、中国が取るか、ヨーロッパが取るか、ロシアが取るか、その戦いが今、始まっているのです。それがこの間のTPPとAPECだったのです。しかし、アメリカが出なかつたことによって、結局うまくまとまらなかつたですね。

その中で日本はどのような位置を占めているかという、みんなどの国も、日本が入ってもらわなければ困ると思つているのです。アジア・太平洋と言つたときに、一番技術があり、一番GDPが高くて、そして、ある種、一番優秀な人々もいるところは日本なわけですね。ですからTPPに日本に「入れ、入れ」と圧力をかけているように見えますけれども、

なぜならば、先ほども言いましたように、中間層がいるところで商売ができることが一番いいのです。中間層というのは、今のシンクタンクの予想で言うと、大体五千ドルから三・五万ドルぐらいの可処分所得を持っている人々のことを中間層と呼んでいます。日本円で五十万円から三百五十万円ですね。それぐらい持っているところの人たちを、中間層と呼んでいます。七千ドルぐらい持つと、日本の第一次三種の神器と言われた、電気冷蔵庫、テレビなどをロインで買うようなことになってくる。それが一万二、三千ドルになってくると、自動車をロインで買うようになってくると言われています。今、この中間層がアジア全体で約八・八億人と言われています。そのうち約四億人が中国人で、ですから中国に物を売りたいというようになってくるのです。

これは、ヨーロッパもアメリカも日本もみんな同じです。ですからアジア・太平洋をひとくくりにして、ここでヘゲモニーを握れば自分たちの輸出先ができるということ、APECやTPPの会合が今、非常に注目されているわけです。先般のAPECとTPPの会合にアメリカ

日本に入ってもらわなければ、TPPなどというものは、本当は成立しないのです。中国は、日・中・韓、東南アジア、それにオーストラリア、ニュージーランド、インドぐらいまでを入れた、RCEPという、十六か国で新しい自由協定を二〇一五年までに作ろうとしています。これも、日本が入らないと困ってしまうのです。

ですから日本がイニシアチブを取れるわけで、「ここは俺が仕切るんだ」ぐらいの、いわば構想力といえますか、リーダーシップ、そのようなものを日本は持つべき時代なのではないかと思つています。

今、日本は「第三の国難」と言われています。ここ二百年ぐらいを考えると、第一の国難は江戸末期、明治維新の時です。第二の国難は、戦争で敗れた一九四五年です。今メディアなどで、それに匹敵する第三の国難だとよく言われるわけです。第一の国難、第二の国難は歴史的に見るとどのようなことだったのか。

第一の国難というのは、二百六十五年間続いた江戸幕府が崩壊しようとしたわけですね。そうすると、どのようなことが起きるかという、「次は自分が政権を担ってやろう」という、長州、土佐、

力は欠席して、何となくイニシアチブを取れなかつた。その間に中国がバートンと台頭して、結構いろいろな国々をつかむようなことをしてしまつたのです。オバマ大統領は、その二、三日後に、自分が国内の問題にかまけてTPPとAPECに欠席したのは間違いだったといつて、自己反省していますね。ある意味で言うと、アジア・太平洋はこれからの中心なのです。ヨーロッパも、ロシアも、アジア・太平洋経済圏に入ろうと思つて、いろいろなところと協定を結びたいと言っています。

特にロシアは、シベリアにたくさん資源があつて、開発が非常にできるのでですね。しかし、シベリアに住みたいと思つて人がいないのです。シベリアは、地図を見ると分かりますけれども、ロシアの半分より少し右あたりからずっとシベリアですから、大変広大な土地を持っているわけです。そこに資源や非鉄金属など、いろいろなものがたくさんあるわけですね。しかしながら、寒いから、あそこで一生懸命働くという人はいないわけですね。少し豊かになると、みんな西のモスクワの方に行ってしまうわけです。シベリアをどのように開発したらいいかというこ

薩摩などですね。そのような人たちがわ
ーっと徳川幕府を引きずり下ろして、自
分が日本の政権を握ってやるという人
たちがいるわけです。しかし、下級武士
や、あるいは開明的な大名、豪商・豪農
という人たちは、そのようなことをやっ
ている時代ではないだろうと、日本は近
代国家になるべきだと考える人もいるわ
けですね。その先頭に立ったのが坂本龍
馬や、吉田松陰、高杉晋作のような人た
ちだったわけです。

維新から二十年かかって近代国家へ

本当に日本で最初の近代国家ができた
のは、一八八五年です。一八六八年に明
治維新が起こって、それから約二十年間
は、言ってみれば、どのような国家を作
ったらいいか、どのような国家の形に作
ったらいいかということをみんなで議論
したり、海外へ出掛けたりして、それを
探っていた時期ですね。一番有名なのは、
岩倉具視使節団です。百人ぐらいの人た
ちが、それぞれヨーロッパ、アメリカ、
それから、植民地になった国々、セイロ
ンなど、約十七か国を一年余りかかって
回ってきて、その中から日本はどのよう
な国家形態にしたらいいかということ

だけども、日本は、これから世界の
中で生きていかなければいけないとい
うことで、ODA、つまり政府開発援助を
どんどん多くして、実額ではそれこそ世
界一になるぐらいまでやっていって、そ
して、一九八〇年代の半ばぐらいから、
だんだん世界の理解を得るようになって
きた。さらに日本はもう戦争をしないの
だ、平和国家で生きるのだということだ
だんだん世界に受け入れられるようにな
って、それから経済がパワーズと強くなっ
てくるというのが、第一の国難と第二の
国難の歴史です。

問われている日本の構想力

今、第三の国難と言われているときに、
一体われわれはどのような構想力を持っ
て、どのような覚悟を持って生きていく
のかということが問われているのではな
いかと思います。今、日本は覚悟をきち
んと決めて、そして、どのように頑張っ
ていくかということが大事だと思います。
技術など、点で見れば強い分野はたくさ
んあるのです。それを集めて、一つの構
想力にする。僕は、「はやぶさ」などが
そうだし、あるいは、山中伸弥さんのi
PS細胞などもそうだと思うのです。そ

議論したわけですから。その他にもいろいろ
な人たちがあちこち回って議論をして、
結局、明治憲法を作り、新しい教育制度
を作り、あるいは殖産興業・富国強兵を
スローガンにし、産業を作り、そして廣
藩置県をやって藩を全部なくし、廢刀令
で刀も取り上げてしまう。そのような意
味での近代国家を作って、第一次内閣が
できたのが一八八五年で、最初の総理大
臣が伊藤博文です。ですから一八六八年
に明治維新が起こったと言っけれども、
近代国家がすぐできたわけではなく、そ
の間、二十年間かかっていたわけではな
く、そして、一八八五年に内閣ができて、
その十年後、一八九四年にもう日清戦争
があるのです。その日清戦争に日本は勝
ちます。そして、その十年後の一九〇五
年に日露戦争があるわけです。欧米では、
これは絶対に日本が負けると思っていた
のに、日本が勝ってしまうわけですね。
ですから、第一次内閣ができてからわず
か二十年間ぐらいで、日本は列強の仲間
入りを果たしてしまっわけです。

早稲田大学大隅講堂



のような構想力もあるわけです。技術な
どに関しては、本当に世界に冠たるもの
をたくさん持っているわけです。それを
点として見ているだけではなくて、点を
線にし、線を面にし、面を立方体にする
構想力を持ったときに、日本はどのよう
にしたらいいのか。そのためには、規制
も緩和しなければいけないうし、あ
るいは、教育の在り方も変えなければい
けないうし。そのような大きな絵を描
くことが大事なのではないかと思っます。

恐慌があつて、戦争の時代に入っていく
わけです。そして、一九三一年には、日
本は満州に侵略するようになるわけです。
そして、どんどん東南アジアも含めて侵
略をし始めていって、世界と大戦を起こ
すわけですね。ドイツ・日本・イタリア
が組み、あとは世界を相手にして戦争を
やる。結局、日本は、一九四五年に戦争
に負けるわけです。これが第二の国難で
す。

一九四五年から五一年までは、アメリ
カを中心とした連合国が日本を統治して
いて、日本は独立していません。新
聞を出すにしても何にしても、全て連合
国の許諾を得なければできなかった。で
すから、日本人は、何とか早く独立しよ
うということで一生涯懸命頑張って、新し
い近代国家の形を作るわけです。例えば
六・三・三・四の教育制度や新しい裁判
制度、軍隊を持たない民主主義憲法など、
これはアメリカの押しつけという部分も
ありますけれども、新しい日本の形を作
るわけです。

そして一九四五年からわずか二十三年、
一九六八年にはGDPで世界第二位の国
になってしまっのです。そのようなどこ
ろが、日本はやはりすごいと思っますね。

例えばOECDなどは、これから世界
は、先進国はただ経済を大きくする、軍
事を大きくする、政治を大きくするとい
うことだけでは意味がないのだというこ
とを言い始めて、ブータンのように、治
安の良さ、寿命の長さ、雇用率、教育、
健康、生活の満足度などの二十項目ぐら
いにそれぞれ点数をつけて順位づけして
いる。そうすると日本は、三十数か国の
うち二十位台です。ですから、まだまだ
足りない部分がたくさんある。経済とい
うのは欲望。欲望と言つと生々しいけれ
ども、欲望があるから、何かを実現した
いと思つと思うのです。今、日本人が
何を考えているかという欲望を見つめ直
すということも、大事ではないかと思っ
ます。

いい「国柄」を持った日本に

今、やはりネットワークということが
非常に重要になっていますね。先ほど言
ったように、TPPはアメリカを中心と
したネットワークを作ろう。中国は、R
CEPといて、中国を中心としたネッ
トワークを作ろう。あるいはNAFTA
などは、アメリカ・メキシコを中心とし
たネットワークを作ろう。いろいろな

ところでネットワークが幾つもあるわけ
です。そのような意味で言うと、本当の友
人を持つなど、そのようなネットワー
クを作ることが大事なかなと思います。

■ 本当の親友というのは、真の友達で、
信頼・信用ができて、深くつきあえて、
心からつきあえる、そのような友人を作
る。人を評する時に「あいつはいい人柄
だな」と言われますけれども、これから
世界では、「ああ、日本というのは、い
い国柄を持った国だな」と。僕はこれか
らは国柄ということが非常に重要になっ
ていくのではないかなと思います。そのよ
うな意味で、技術などということだけで
はなくて、どのような国柄の日本を作る
ことが世界で存在感を増すことになるの
かということも、考えていただきたいと
思います。

■ もう日本は軍事大国にも、政治大国に
も、経済大国にもなることは多分ないで
しょう。また推計ですが、日本の人口は、
二〇五〇年には九千万人前後、二二〇〇
年には実に四千七百万人です。この人口
統計ほど当たるものはないのです。皆さ
んの子供さんやお孫さんは、二一〇〇年
の時代の日本を生きなければいけないわ
けです。そのようなときにどのような国

柄の日本になっていると、世界の中でき
ちんと評価され、敬意を持って見られる
かというようなことも、考えておく必要
があるのではないかなと思います。どうも
ご清聴ありがとうございました。

（この講演は、昨年十月十二日、早稲田
大学大隈講堂（小講堂）で行ったもので
す。）

講演者のプロフィール

しま のぶひこ
一九六七年慶応大学経済学部卒業、毎日
新聞社入社。ワシントン特派員などを歴任
して一九八七年退社、フリーとなる。
現在BS-TBS「グローバルナビ・フ
ロント」（土曜十時）、BS朝日「ザ・イン
タビュー」（土曜十八時）、TBSラジオ「高
信彦のエネルギーネットワーク」（日曜二十
三時）、同ラジオ「森本毅郎スタンバイ」（水
曜七時）出演中。NPO「日本ウズベキス
タン協会」会長。先進国サミットの取材は
約三十回に及ぶ。

岡野裕基金とは

通信文化協会では、通信事業発展のために
力を注いだ故岡野裕氏（元通信協会会長）
の遺志を継ぎ、ご遺族からの寄附金により
平成二十一年に基金を設立、コミュニケー
ション文化の振興と発展を目的とした文化
活動のために役立てています。